

誰もが知っていることをできるように

部活動の外部コーチとして練習試合に参加したり、休日に誰かと会ったりする機会がありますが、これまでの「先生」という立場のときとはちょっと異なる感覚を味わいます。「先生」をやっていると、とにかくいろんな人に会います。クラスの生徒や学年の生徒、部活動の生徒、保護者など、とにかく会う人が多い。誰かと時間をかけて深いところまで話すという機会はあまりありませんでした。

しかし、今年になり、会う人の数は圧倒的に少なくなる分、特定の誰かと会った時に話す時間は長くなったように思います。そして、時々しか会わないとなると、会った時にその人から吸収することは自然と多くなる気がします。

特定の人と毎日のように関わっていると勘違いしやすくなることがあります。それは、目の前の人は、「自分のことを知ってくれている。分かってくれている」という思い込みです。例えば、自分がクラス担任をやっているとします。Aさんに読書の大切さを説きました。そして、次の日に、Bさんと雑談している中で、読書が話題になり、自分が「読書が大切だと思う理由」を語ります。すると、今度は教員同士で、「最近、朝読書がおろそかになっている」ということが話題にあがり、読書の大切さを各教室で話そうという約束をしたとします。そしてその翌日、朝の学活で、読書に対する担任の思いを語ります。

このとき、担任はこの数日で、読書に対する自分の思いを少なくとも3回以上語っています。教員同士での会話でも「私はこんな話をしようと思います」と言っていれば、4回以上。こうなると、無意識のうちに、「最近何度も読書について語っている」という感覚が自然と芽生えてきます。すると、クラス全体の前で話すときの内容に、「前も言ったかもしれないけど…」という付ける必要のない言葉がついたりします。そして、なかなか伝わらないこう思います。「これだけ何度も私は説明しているのに…。」

立場を変えてみます。これがAさんだったら、読書の重要性について話を聞くのは2回目です。Bさんも同じです。しかし、Aさん、Bさん以外の生徒にとっては、この話を聞くのは初めて(1回目)なんです。

難しいのはこの点です。私たちは繰り返し、同じ話をしていて、あたかも「自分はこれについては、何度も語っている」と感じるようになります。しかし、相手によっては、この話を「初めて」聞く人も多くいるのです。

こうなると、徐々にギャップが生まれてきます。自分にとっては、「何度も言っている」のに、相手にとっては人によっては「初めて聞いた」というギャップです。

YouTube 講演家の鴨頭嘉人さんはこう言います。「教育業は、誰もが知っているけどできていないことを、やろうという気持ちにさせてあげることが仕事である」と。今回の例である読書の大切さをはじめとして、元気よく挨拶をすることの大切さ、人の話を真剣に聞くことの大切さ、目標をもつことの大切さ、早寝早起きをすることの大切さ、…。私たちは、子どものころからずっと言われ続けてきた大切なことをたくさん知っています。そして、頭ではわかっています。でも、できないんです。正確には、「大人になるにつれてできなくなる」んです。

この「できなくなる」を最初に経験するのがもしかしたら中学生のころかもしれません。だから、いろいろなことに対して自信を失っていくのかもしれませんが、小学生の頃ならできていたことが、周りの目が気になり始め、できなくなる。そして、「恥ずかしい」「やる意味がわからん」などと「やらない理由」を探し始めます。しかし、頭では分かっているんです。「やった方がいい」って。でもできない。だから、教育に携わる人の役割は、鴨頭さんが言うように、これらの大切なことを、どうやって、「できる環境をつくるか」ということなのだと思います。

そのために大切なことの一つは、「何度も伝える」ことです。言い方を工夫して、取り上げる例を変えながら、何度も誰かの心に響くように伝え続けていく。決して「何度も言っているのになんでわからんのよ」と言うてはいけません。なぜなら、「完璧に伝える日はやってこない」からです。だから、「決して完璧にはならない」ということを“許しながら”“許可しながら”伝えることを諦めないでほしいです。「どうせ自分なんかには伝えられない」ではなく、「伝わらなくて当然だ」「こういうものだ」と自分を許可しながら、伝える努力を諦めずに、続けていきたいものです。